定年を迎える教授の特別寄稿

定年退職にあたって

板橋 家頭夫

医学部 小児科学講座
（昭和大学病院 小児科）

1979年（昭和54年）に昭和大学を卒業し、直ちに昭和大学小児科学講座に入局しました。その後、いったん昭和大学を離れていたのですが、縁あって2002年（平成14年）に昭和大学横浜市北部病院こどもセンターに復職、2003年（平成15年）12月には講座主任教授を拝命し、本年3月をもって退任いたします。教室員・同門はもとより昭和大学の皆さまには長きにわたりご支援をいただき心より感謝申し上げます。

主任教授に就任したおりは初期臨床研修が本格的にスタートする時期で、入局者が少なく、小児科医確保に苦心する日々が続きました。関連病院への派遣も思うようにならず、教室の先生方には大変つらい思いをさせてしまったことは今でも心苦しい限りです。その後教室員は少しずつ増えていき、昭和大学病院、昭和大学藤が丘病院、昭和大学江東豊洲病院、昭和大学横浜市北部病院および派遣病院に出向している現役教室員の総勢は90人を越える陣容となりました。各附属病院の小児科では、小児救急や新生児集中治療にも対応していますので、まだ十分な医師数とは言えません。次代を担う子どもたちの健康と福祉を維持・発展させていくことはわが国の根幹に関わることです。必ずや小児科医を志す医師が増えてくれると期待しています。

私の専門は新生児集中治療で、とくに低出生体重児の栄養や発育を中心に診療・研究を行ってきました。わが国で唯一使用されている母乳強化パウダーの開発や出生後早期からの静脈栄養の導入、わが国の在胎期別出生体格値の作成、HTLV-1母子感染予防対策マニュアルの作成などに携わることができ、臨床医冥利に尽きる39年間でした。今後は後輩諸氏にバトンを譲り、昭和大学病院長としての職務に専念し、昭和大学の発展に少しでも寄与できるよう頑張りたいと思います。

退任にあたって

磯山 恵一

医学部 小児科学講座
（藤が丘病院 小児科）

1978年（昭和53年）に医学部を卒業、開設3年目の藤が丘病院小児科レジデントとして院内に居住しながらの医師生活をスタートしました。当時の責任者である石川昭教授の下、数名のスタッフが立ち上げたばかりの診療科でしたが、新しい小児科を作ろうという気概と希望を持って仕事をされていました。小児血液疾患に偏ることなく、小児科医として必要な疾患を多数経験することができ、医師としての基本を叩き込まれました。研究や論文執筆についても厳しくかつ楽しく指導を受けたことが、つい最近のように思い出されます。

私は、約半年間の出張病院での勤務と13か月間のアメリカでの留学期間以外は、藤が丘病院に勤務することができました。現在では普通の治療法の一つになっている臍帯血移植が普及する端緒となった神奈川臍帯血バンクに関われたことや、厚労科研の分担研究をとおして医療の世界から社会のしくみを見ることができたことはとても大きな財産となりました。またその時々で、さまざまな方々と巡り合い、ご指導を受けました。大過なく今日まで勤め上げられましたのも、多くの諸先輩、同僚、数多くの後輩に恵まれたおかげと心から感謝しております。

今後は、昭和大学特任教授として新たなスタートをきりますが、今まで学んだことを生かし微力ながら昭和大学に恩返しをしていきたいと思っております。これまで同様、ご支援並びにご指導をよろしくお願い申し上げます。

定年退職に際して

田中 一正

富士吉田教育部

1973年（昭和48年）、今の職場であります富士吉田校舎から今と同じ富士山を眺めました。医学部4年次の指導担任でした藤が丘病院呼吸器内科の故野口英世教授との縁で、1979年（昭和54年）卒業と同時に、藤が丘病院内科24時間レジデント制臨床研修を受け、そのまま呼吸器内科に入局しました。私を変えた一番大きな事例はファントム機墜落事故から4年経ったその後の医療であったと思います。1996年（平成8年）まで呼吸器内科医としての研鑽をさせていただくとともに、旧緑区医師会・横浜市医師会勤務医部会員への参加、内科系医局長として藤が丘リハビリテーション病院開院準備、総合医局長として横浜市北部病院開設に向けた検討への参加を経験させていただきました。1997年（平成9年）より豊洲病院内科助教授として、肺の生活習慣病COPDを中心に呼吸ケア・リハビリテーション、在宅酸素療法などメディカルスタッフとともに当該地域でのチーム医療に携わらせていただきました。2005年（平成17年）保健医療学部に転出、2006年（平成18年）教養部から富士吉田教育部に改組された年に、新しく加わる保健医療学部新入生とともに富士吉田教育部教授として1年生600人の寮生活の真っただ中に赴任しました。単なる共同生活の場から、共同学習の場へ、チーム医療を目指した体系的・段階的学部連携教育の初年次からの実践IPE（Inter-professional Education）専門職連携教育の始まりでした。以来12年お世話になりました。この間学生部長・校医として寮生活独特の環境・精神的問題にも四苦八苦しました。在職中に富士吉田校舎50年記念誌作成に関われたのは良い思い出になりました。今日まで多くの関係者のお導き、ご協力があってこそ勤められたと感謝申し上げる次第です。

このたび昭和大学特任教授として昭和大学ふるさと成18年）教養部から富士吉田会統括主管を拝命しました。今後ともご支援ご教導のほどよろしくお願いいたします。

定年退職に際して

浅野 和仁

保健医療学部 作業療法学科

私は1979年（昭和54年）に昭和大学大学院医学研究科博士課程に入学、学位取得後1983年（昭和58年）に故岡本謙一教授が主宰する医学部医動物学講座に助手として入職して以来、35年が経過いたしました。このたび、つつがなく定年を迎えることができるのも私を支えていただいた恩師をはじめとする諸先生方、大学関係者の方々のおかげと感謝申し上げます。

私の昭和大学での35年間は大きく3つに区分することができます。最初の14年間は故岡本教授から教育・研究の分野に身を置く者の心構えをご指導いただき、その教えが今も私の中に根付いています。

その後、1997年（平成9年）5月に当時の中井医学部長から第一生理学講座（現生体制御学部門）への異動を打診され、久光正教授（現副学長）の元へ伺ったところ、研究テーマは現状のままで良いが、大学院生の研究指導と生理学の講義を一部担当してほしい等のお話があり、久光教授の懐の深さや人柄に惹かれ、同年7月に生体制御学部門に異動、教育・研究に従事させていただきました。生体制御学部門は東洋医学の科学的解明というテーマを掲げており、教室をあげて研究に勤しんでおりましたが、久光教授のお言葉の通り、私は教室のテーマに縛られることなく研究を行うことができました。感謝の言葉以外ありません。どうもありがとうございました。

異動9年後には、保健医療学部の完成年度に合わせ、大学院を開設することになり、長津田校舎に生理学担当教授として赴任いたしました。長津田校舎では、学生教育のみならず、副島和彦学部長（現名誉教授）の下、大学院の開設、運営に微力ではありましたが携わせていただきました。誠にありがとうございました。今後は、長津田校舎での経験さらには昭和大学で学ばせていただいたことを糧に新天地で精進したいと考えております。

定年退職に際して

関屋 昇

保健医療学部 理学療法学科

昭和大学医療短期大学の開設時1997年（平成9年）から理学療法学科の教育に関わらせていただきました。山あり谷あり、実にさまざまなことがありましたが、昭和大学での教員生活21年間があっという間に過ぎていったというのが今の実感です。多くの方々にたいへんお世話になり、お陰様で大過なく業務を遂行することができたことに感謝申し上げます。

短期大学が始まって一段落する前に4年制教育への検討が始まり、2002年（平成14年）に保健医療学部が開設され4年制学部教育が始まりました。当時の学科主任の高橋正明先生に教授に推薦していただき、教授としてのさまざまな経験をさせていただくことができたことに感謝せずにはいられません。

学部教育が一段落したころに1年生の富士吉田教育部2006年（平成18年）に保健医療学部の1年生の富士吉田全寮制が始まり2007年（平成19年）には保健医療学研究科修士課程が始まり、カリキュラム作りに関わらせていただきました。昼夜開講制の大学院教育では、2年間の限りある時間の中で、ほとんどの学生が常勤の仕事を持っていて時間との戦いでしたが、さまざまな議論をしながら研究の力添えをすることができ、充実した時間を持つことができました。2012年（平成24年）には博士課程が始まり、現在までに修士課程と博士課程合わせて20人を越える学生たちと研究を共にすることができたことに感謝しています。

この21年間が充実した貴重な時間になり、このように定年を迎えることができたのは理学療法学科の先生方のご協力のおかげです。この間にさまざまな困難もありましたが、問題が生じたときの錯綜する議論の中でいつも一筋の光を見出すことがきたのは、先生方の教育・研究への情熱と自由に語り合う風土があったからだと思います。この場を借りて感謝申し上げます。

最後に、今後の昭和大学ならびに昭和大学理学療法学科の益々の発展をお祈りいたします。

終わりなき癌との戦い

佐々木 康綱

医学部
内科学講座 腫瘍内科学部門
（昭和大学病院 腫瘍内科）

昭和大学の医療の強みは、「チーム医療」といわれている。しかしこの言葉を何回叫んでみても実質的な医療の質が改善されるわけではおります。

昭和大学の益々のご発展を祈念いたします。

ない。癌医療とは、まさにチーム医療そのものであり、臨床と基礎の各講座だけでなく昭和大学全学部にわたって何らかの形で、癌医療に関わっている。チーム医療の実現のためには、インフラ整備が必須であり、遅ればせながらようやく多職種が同時に患者情報を共有するためのプラットフォームである電子カルテが導入されたことは何よりである。癌診療がチーム医療を基盤とすることは言うまでもなく、またこの領域では「チーム医療」が昭和大学の専売特許でもない。それぞれの職種が高度な専門性に基づいて有機的に参画することこそが真の癌チーム医療である。かつてある新聞の取材を受けて、「薬物療法に精通していない外科系医師が、安易にがん薬物療法を行うことは、内科系医師が手術をすることと同じである」と発言した。カンファレンスなどで時に歯に衣着せぬ発言をしたことは、このような想いがあったからである。昭和大学病院では、癌チーム医療や癌診療のプロフェッショナリズムに関しては、依然としていくつかの課題が残されている。

アカデミアにおける最後の職場として、5年間余りを母校に奉職できたことは、望外の幸せであった。この間、大きな癌医療の道筋をつけたと自負しているが、昭和大学の「チーム医療」が真の意味で質の高い「チーム医療」へと発展することを学外より切に祈っている。